

風景構成法で描けないこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4747

風景構成法で描けないこと

坂田浩之

臨床心理学専攻講師・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究は、心理療法のプロセスのなかで風景構成法を行う場合に、時として生じる、クライアントが描けないという事態を扱い、この事態において風景構成法が心理療法として機能するために必要とされることについて検討した。まず、皆藤（1998）による、風景構成法による描画の拒否が起こった事例とそれに対する考察を吟味し、風景構成法で描けないこと、そして風景構成法自体が心理療法として機能するためには、心理臨床家に、関係性の次元の把握と「ことばのない世界」への視点が必要であることが確認された。次に、「ことばのない世界」という言葉が表現するものへの理解を、類似の概念を概観することによって深めた。その上で、風景構成法で描けないことが生じた自験例（坂田，2004）をあらためて考察しなおし、それが「ことばのない世界」の布置を示す表現の一つであったこと、また、それが生じたセッションにおいて、その布置が繰り返し表現されていたことを明らかにした。

キー・ワード：風景構成法、関係性、「ことばのない世界」

1. はじめに

心理療法において、かく（書く・描く）ということは、必ずしも中心的な営みではない。むしろ、聴く、語る、プレイする、関わることの方が、心理臨床においては目につく行為であるし、あるいは沈黙しつつ感じる、考える作業が活性化されていることの方が重視される。心理療法家によっては、面接中に記録を書くということもあるが、その場合にも、中心となるのは、聴く、感じる、考える、関わるといった営みである。その意味では、かく（書く・描く）という行為は、心理療法の中では、描画療法など芸術療法の一部に限定的に生じる行為であるといえる。

2. 風景構成法で描けないことについて

筆者は、自らの心理療法の場において、ときに応じて、風景構成法を行うことがある。風景構成法という技法は、心理療法家からクライアントに実施を提案し、その提案をクライアントが受け入れると、心理療法家がクライアントの目の前で白

紙の画用紙に四角く枠線を描き、クライアントの前に差し出し、その枠線の入った画用紙に心理療法家の言うものを一つずつ描いて最終的に一つの風景になるように伝え、山や川など風景の構成要素を決められた順に一つずつ口にして、クライアントがそれを聴いて描くというものである。この技法の特徴の一つは、心理療法家がクライアントの目の前で枠線を描いてそこに描いてもらうということや、心理療法家の発言に応じてクライアントが風景構成法に入ることや描くことを決めることに見られるように、心理療法家の発言を含む行為が先導し、クライアントの行為をあらかじめ枠付けするという点である。そのため、クライアントの主体性の発露を重視する心理療法において、風景構成法を提案するかしないかに関して心理療法家の側に葛藤が生じ、決断を迫られる事態が生じる。また、心理療法家の風景構成法の提案に対して、クライアントが描けない、あるいは描画を拒むという事態がときとして生じる。筆者もこの事態を何度か体験し、一つの事例について報告して

いる（坂田，2004）。

「やりとり」（interaction）という観点からすれば、風景構成法においてクライアントが描けないという事態は、心理療法家があらかじめ設定し、提示した枠組みに入ることを、クライアントが拒んだという意味にとらえることができる。皆藤（1998）は、風景構成法の提案がクライアントによって拒否されたエピソードを描写し、“筆者が感じたのは、クライアントの拒否は風景構成法を描くことにたいするものではなく、筆者に描画を強いられたことにたいするものであった、ということである”とこの事態を「やりとり」の観点からとらえている。また、ここから皆藤は、心理臨床家における関係性の次元の把握がおろそかになり、コミットメントが浅くなると、風景構成法は心理療法としては機能しなくなっていく、“風景構成法が心理療法として機能しなくなると、当然のことながら、枠づけおよび項目逐次提示→描画という風景構成法の特性は描画を強いるものとなる。それは、クライアントにとっては苦痛の体験以外の何ものでもなくなるであろう”と論じている。つまり、心理療法家があらかじめ設定し、提示した枠組みの中にクライアントが主体的に入るという行為が起こらなければ、風景構成法は心理療法として機能しないということである。こうした事態は、クライアントが約束した面接の時間に来ないことや、設定された面接時間や面接の場で語ったり、プレイすることができずに、面接室の外で饒舌になったり、活動的になったり、別の行為で発散したりすること、面接時間中に面接室の外に出ようとする、退室しおろといった形でのどのような心理療法においても生じうることである。

クライアントが心理療法家の設定した枠に入らないという事態は、心理療法にとっての危機的な状況である。なぜならば、心理療法の真理は無限に開かれている内面性であり、時間と場所を決めて会う、アクティング・アウトしないようにして、心理療法の枠内で問題と向き合おうとする心理療

法の構造自体が内面性の原理に基づいている（河合，2001）からである。かといって、クライアントが強制的に心理療法家の設定した枠に入れさせられるという事態は、皆藤が指摘するようにクライアントにとっては苦痛の体験以外の何ものでもなく、そうなるとその枠は心理療法として機能しなくなる。かといって、クライアントが入りやすいように、あるいはクライアントの苦痛を和らげるために、設定を柔軟に緩やかなものに変更しても、心理療法は機能しなくなっていく。心理療法の真理である内面性は貫き通され、“どこまでもそれに徹するからこそ、無限のものに開かれていくのであって、その意味で最初から広げようという折衷的な態度は問題であることが多い”（河合，2001）からである。心理療法における真理は、“本当に真理を信じて”、“意図的に努力してその中に入っていくことによってはじめて実現する”ものであり（河合，2001）、クライアントにこのような主体的な心の動きが、たとえば、心理療法家の提案した風景構成法を信じて、意図的に努力してその中に入るという主体的な心の動きが生じなければ、それは心理療法として機能しなくなってしまう。しかしながら、こうした動きがクライアントにおいて生じることを心理療法家は操作できるものではない。

こうした場合に、よく「ラポール（信頼関係）の形成が重要」という言説が用いられる。しかし、このラポールの形成とは何なのだろうか。上記のことを踏まえた上で、このことを考えるならば、それは「良好な対人関係」といった意味合いのものではないことが理解される。このことと関連して、皆藤（1998）は、関係性の深まりというのは、関係性がイメージの深層領域（「ことばのない世界」）に下降していくことであって、現実のクライアントとの関係が深まることをいうのではないことを指摘している。先に引用した“関係性の次元の把握”、“コミットメントが浅くなる”という言葉もこの文脈において述べられていることを見逃すことはできない。

「次元」という観点が出てくると、クライアントが風景構成法を描けないという事態は、ただ単に、クライアントが心理療法家に強いられたことを拒否するというやりとりにとどまらないことが見えてくる。皆藤（2004b）は、風景構成法において枠づけが成された段階を“これから切断・分節化が生まれ世界がリアライズされていく直前の在りよう”とあらためて位置づけ直し、クライアントが風景構成法を拒否する事態について、“クライアントが自身の境位を現在の分節化段階に留まらせようとする決断であると同時に、心理臨床家との関係をとおして分節化されリアライズされる世界体験にはいまは与しませんという決断である、とわたしは考えています”と述べている。つまり、クライアントが風景構成法で描けないという事態は、クライアントが切断・分節化以前のことばのない世界にあり、関係性を深めるためには、心理臨床家の心が「ことばのない世界」と呼べる次元に降りてくる必要があることを心理療法家に伝えている事態だととらえることができる。

そのような真理に心理療法家が入っていけると、クライアントが風景構成法を描けないことが、心理療法として機能していくことができる。皆藤（1998）のエピソードでは、心理療法家が「やりとり」の流れにまかせると、まったく言葉のない沈黙の中、心理療法家が枠づけして渡した画用紙に、クライアントが自発的に描画を行い、乳飲み子を抱く母親とその傍らで幼な子を抱くクライアントという保護のテーマが明瞭に見て取れる絵が描かれるという展開が生じている。つまり、枠線の描画を強いる側面を顕在化させたのと同じ枠線が、保護という枠線のもう一つの側面を描画内容として現出させている。

ここから学ぶことができるのは、風景構成法が、そして風景構成法で描けないことが心理療法として機能するためには、その場で必要とされている関係性の次元を把握する必要がある、さらにそのことを把握するためには、心には“ことばのない世界”と呼ぶことの出来るような次元、位相があ

るという視点が求められるということである。

3. 「ことばのない世界」

「ことばのない世界」に関して、皆藤（1998）は、“区切ることのない”，“それがそれそのものとしてある世界”，“あらゆる可能性・危険性が潜在的にある点で「全」であり、いまだことばによって開かれていない点で「無」である”と説明し、「ことばによって開かれた世界」と対比的に用いている。さらに、皆藤（2004b）においては、「ことばのない世界」・「ことばによって開かれた世界」は、それぞれ“K”，“A”という記号で表されている（風景構成法での自我的なやりとりは“E”という記号で表されている）。また、皆藤（2004a）においては、“関係性”という表現が出てくるが、“「関係性」とは何かを語ることは非常に難しい。語ることで切断してしまうからである。それを承知であえて語れば、あらゆるものの関係の総体を意味する「何か」であると言うことができるであろう”という説明から、これも「ことばのない世界」と同じものを語ろうとしていることが推察される。

「ことばのない世界」、これを分節化する言葉の働き、言葉によって分節化された「ことばによって開かれた世界」に関しては、皆藤以外にも、様々な言及がなされている。皆藤（1998）自らは「ことばのない世界」に関連する概念としてユング（1916）の“プレロマ（Pleroma）”を挙げている。他にも、たとえば、河合（1995）が、井筒（1989）を引用しながら華嚴經からとり上げている“限りなく細分されていった存在の差別相が、一挙にして茫々たる無差別相の空間に転成”した“理法界”も「ことばのない世界」に相当するものだろう（一方、「ことばによって開かれた世界」に対応するのが“AにはAの本性があり、BにはBの独自の性格があって、AとBとはそれによってはっきり区別され、混同を許されない”普通の現実の世界である“事法界”だといえる）。あるいは、川崎（2001）は、“本来、個別的で一回性の

ものであるはずの現象が、言語の分節化作用を通して普遍的なものとして捉えられることになる”，“すべての現象は時間の経過にともない刻々と生成変化する一回性のものである。コトバの分節化はこのようなたゆみなく流動する生成変化を去勢することで時間を含まない同一性を打ち出し、世界を固定していく”，“排除されたこの生成変化という場とは同一律が成立しない位相，すなわち何物も自立性を有しない，関係性のみが流動する場である”と表現している。また，宗教学者の中沢（2004）は，“存在の不可分モード（対称モード・均質モード）”と“存在の非対称モード（非均質モード）”（Matte-Blanco, 1988）という，それぞれ「ことばのない世界」，「ことばによって開かれた世界」に対応する対比的な概念を提出しているMatte-Blancoの理論の影響の下，自らの「対称性」という考えを発展させ，“「心」の基体である流動的知性＝対称性無意識”という概念を提出している。木村（2005）が，“自他未分のメタノエシス的な根底”，“対象への意識的表象以前の生命的な関わり”と説明する“ヴァーチュアリティ（virtuality）”という概念も，「ことばのない世界」に対応するものであると考えられる。木村（2005）が“現勢態であるアクチュアリティは，潜勢態であるヴァーチュアリティがそのつどの現在においてそれ自身を限定し個別化する過程で，触媒のようにはたらいて，それによって意識面でのリアリティの生成を触発し，リアリティにぴったり張り付いたかたちでそれ自身を顕在化する”と述べていることは，先述した川寄（2001）の記述との親近性が感じられる。あるいは，岩宮（2005）が“永遠に割り切れない世界（超越の世界）”，“割り切れてしまう世界（日常）”と表現していることも，「ことばのない世界」と「ことばによって開かれた世界」に対応するものであると考えられる。

これらの概念，これらの視点は，哲学的に意味があるのみでなく，心理療法の場で生じているプロセスを理解する上で，あるいは，実際の心理療

法の場合での自身のあり方を鍛えていく上で，必要となるものであるからこそ，様々な心理臨床家が言及しているのであるといえる。たとえば，岩宮（2005）が，“超越の世界に対しての想像力を持っていると，日常の着地点を見つけていく方向性が俯瞰しやすくなる。現実という地面だけに縛られていると，未来を見通すことはできにくい，超越という視点を持つことで，現実への着地点がかわって見通せるようになる……”という臨床の実感がある”と述べているのも，それを裏付けるものである。また，“実際に心理療法に従事していると，そもそもの「現実」とは何か，というような根本問題についても考えざるを得なくなってくる”（河合，1991）というような実際上の要請から，それぞれの臨床家が自分で考え，最良の表現を求めていく中で生み出されてきたものだから，そして，そもそもことばではとらえきれないものだから，人によって，さらには同じ人においてもそのつどそのつどで，違う名前，違う表現で述べられているのだと考えられる。

「ことばのない世界」に対する想像力を持つことが特に必要なのは，風景構成法を含め，表現活動を用いた心理療法であろう。このことに関して，河合（1992）は，“「表現」という言葉をよく使うので，クライアントにとってはわかっていることが，絵や箱庭によって「表現」または「表出」されると思われるが，これらのことが療法としての意味をもつのは，そのようなことをこえて，そこに何らかの創造活動がはいるからであることを知っておくべきである。つまり，クライアントは自分にとって既に知っていることを表現するというより，そのような活動をしている間に，自分でも今まで気づかなかったことが出てくる，あるいは，新しい可能性が生まれてくる，のを感じるのである”と述べているが，創造や新しい可能性が生まれるためには，「ことばのない世界」が“非恒常的に立ち上がる”（木村，2005），あるいは，“日常的な時間を垂直に切り裂くようにして…（中略）…突然降ってくる”（中沢，2004）ことを必要と

するからである。

4. あらためて風景構成法で描けないことについて

振り返って、あらためて、筆者の自験例（坂田，2004）において、風景構成法で描けないことによって、どのようなプロセスが生じていたのかを考察したい。クライアントのAさんとは既に40回以上の面接を重ね、風景構成法も数回行われていた。そのセッションの様子を以下に再録する。

Aさんはいつもセラピストの斜め前に座るのに、今回は戸惑いなくセラピストの真正面に座る。セラピストは黙ってAさんが語りだすのを待つが、いつもにも増して沈黙が長く続く。何か言いたいことがあるのだが思い切れないでいる、あるいは、うまく言葉にならないといった様子。セラピストはきっかけになるかもしれないし、言葉でない方がうまく表現できるのかもしれないと思い、描画に誘ってみると首肯する。

セラピストが画用紙に枠を描いて渡すと、ペンを持って構えるが、そのまま考え込むように動かない。しばらくして「今日はやっぱり描けそうもないので……」とペンを置く。セラピストが「今日は何か特別な感じがあるんですか」と尋ねると、しばらくしてようやく思い切ったように「カウンセリングをどう受けたらいいのかわからなくなって」と。「もともと個人的なことは親にも話さない。人間嫌いなんです。人はみんな自分がかわいくて、自分が頼っても面倒に思われるだけ。自分の人間嫌いは直す必要はない。ただ淡々と自分の仕事ができたらいい」。

その前のセッションで、Aさんは筆者に「話すより書く方が自分は得意だから」と言って、メールでのやり取りを提案している。それに対して筆者はメールでのやりとりを受け入れず、書いたも

のを持参することを提案し、Aさんも「作文のようなものを持ってくるかもしれませんが」と応じている。しかし、Aさんは、書いたものを持参せず、上記のように、いつもより筆者との距離を縮めて対座している。この時点で既に、“かけない”ということが布置していることに、そしてそのことをクライアントが積極的にメッセージしていることにあらためて気づかされる。風景構成法で「描けない」が生じたのはそれが再度表現し直されているといえる。書いたものが持ち込まれる代わりにもたらされたのは、思い「切れない」、「言葉にならない」様子での沈黙であった。「ことばのない世界」にクライアントがあることを、そして必要とされている関係性がその次元にあることを明示している。“筆者もいつもと違う様子のAさんに気がついてた”（坂田，2004）が、それにも関わらず筆者が風景構成法を提案しているということは、その時点での筆者は、関係性の次元の把握がおろそかになり、コミットメントの次元が浅くなっていたといえる。しかし、「描けない」ということが目前で生じて、筆者はそれまでとは違う何かが布置していることを把握している。そのことは、「今日はなにか特別な感じがあるんですか」という発言に現れている。また、それに対するAさんの答えが聞かれ、やりとりが生じていることを踏まえると、この時点で、筆者がAさんが必要としている関係性の次元に降り立つことができたのではないだろうか。Aさんが思い「切って」発言（分節化）した「わからなくなつて」という応えも、Aさんの心の在りようが「ことばのない世界」に移っていき、それまで分節化できて（分かって）いたことが、うまく分節化できなく（分からなく）なっていることを言葉で表現し直しているといえる。さらに、その後の、「個人的なことは親にも話さない」「人間嫌い」「自分の人間嫌いは直す必要がない」といった一連の発言は、Aさんが必要としている関係性の次元が、“日常的な人間関係とは異なり、極めて非個人的（impersonal）なもの”（河合，1995）であり、“人間と、

石、木、川そして風などとの関係をモデルとして考えることができ”（河合，1995）るたましいのレベルのものであることを表現しているにとらえることができる。こうして，風景構成法で「描けない」ということが生じたこのセッションを詳細に振り返ると，セッション全体が，「ことばのない世界」の布置を表現していることが読み取れる。描かれなかった白紙の画用紙を見て，絶対無の境位を象徴化した十牛図の「人牛俱忘」が自発的にイメージされた（坂田，2004）ことも，この布置を反映したものであることがあらためて理解される。また，筆者にこのような関係性の次元のとらえ直しの動きが起こったから，風景構成法で描けないことが，心理療法として機能することができたのだと考えることができる。

5. 終わりに

本論文では，「風景構成法で描けないこと」という，心理療法全体の中では，ごく限定的な事態について先行研究に学びつつ考察を試みた。その考察のプロセスの中で，限定的な「描けないこと」についてコミットしていくことは，風景構成法全体について，あるいは心理療法全体について考えることにつながっていることをあらためて実感させられた。しかしながら，“技法を磨くためには，その意味についての考えを深める努力を必要とする”（河合，1992）のであり，本論文で考察したことを，ことばの働きによって固定化させ，そのまま他の心理療法の営みに適用することなく，心理療法場で，そのつどそのつど，あらためて，「ことばのない世界」について想像し，考え，入っていく努力を行っていくことが今後の課題である。

文献

- 井筒俊彦（1989）：コスモスとアンチコスモス，岩波書店
- 岩宮恵子（2005）：思春期と超越一器としての家族の役割 滝川一廣編 こころの科学 122 pp.44-49
- Jung,C.G. (1916) : *Septem Sermones ad Mortuos*. Translated by Baynes,H.G.,London, Stuart & Watkins, 1967. 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳（1972）：死者への七つの語らい，ユング自伝－思い出・夢・思想2. みすず書房
- 皆藤章（1998）：生きる心理療法と教育 臨床教育学の視座から，誠信書房
- 皆藤章（2004a）：投映法論－イメージと人間 臨床心理学全書7 臨床心理査定技法2 誠信書房 pp.1-49.
- 皆藤章（2004b）：事例のなかの風景構成法 風景構成法のときと語り，誠信書房 pp.164-202.
- 河合隼雄（1992）：心理療法序説，岩波書店
- 河合隼雄（1995）：ユング心理学と仏教，岩波書店
- 河合俊雄（2001）：心理療法における真理と現実性 河合隼雄（編）講座心理療法7 心理療法と因果的思考 pp.167-208.
- 川崎克哲（2001）：心理療法において因果律が揺らぐことの意義とその諸形態について 河合隼雄（編）講座心理療法7 心理療法と因果的思考 pp.23-71.
- 木村敏（2005）：関係としての自己，みすず書房
- Matte-Blanco,I. (1988) : *Thinking,feeling,and being:Clinical reflections on the fundamental antinomy of human beings and World*. 岡田達治訳（2004）：無意識の思考，新曜社
- 中沢新一（2004）：カイエ・ソヴァージュV 対称性人類学，講談社
- 坂田浩之（2004）：あるうつ青年との心理療法のプロセスのなかで風景構成法を用いた事例 皆藤章（編）風景構成法のときと語り，誠信書房 pp.122-163.